

酒肴酒



[酒肴酒_下载链接1](#)

著者:吉田 健一

出版者:光文社

出版时间:2006/2/9

装帧:文庫

isbn:9784334740276

食えること、飲むことの喜びをゆったりと味わうー。うまい酒、うまい料理。文章そのものに酔い、読むことを味わう。“食”の幸せが溢れる名著。

幼少より欧州の文化に触れ、国際人として育った同氏の上手い酒、上手い肴に関するエッセイである。ああでもない、こうでもないと文句をつけるのが食通だという事には疑問を持っていたとは蓋し名言である。

酒にしても世界中のものに言及しているが同氏が愛したのは、実に日本的なおでんのようなものではなかったかと思われる。その地その地の水、湿度、温度で長く食べられてきた物に不味い物は、ないのではなかろうか？ 同氏が、座談の名手であったと思われることがよく解る一冊である。

英国文学の研究者として、英国に置ける上流社会であるとか、貴族の存在を比較的肯定的に紹介してきた著者ではあるが、こと、食と酒については、変に奢らず、「グルメ」ぶらない姿勢、「旨いものは旨い」と言い切るところは、むしろ、ややこしい形容詞を乱発するような、怪しげな比喻を乱発するような「グルメ」本とは、一味違っている。むしろ、読後感としては、ああ、この人は、案外庶民的に、どんなところでも旨いときかされれば気取らずに駆けつけていく「餓鬼」なのかもしれないと思った。もちろん、文章は、極めて格調高く、かつ読みやすい。このギャップが、たまらない魅力となっていると思う。

言うまでも無く、本書に収録された「グルメ情報」は現在では古びており、実用的な役割は期待できない。ここで展開されているのは（よく知られている）吉田の一見すれば晦渋な、しかし貴族的で高雅な文章が織りなす美しすぎる世界であり、吉田の美食本の多くが手に入らない今、このような読みやすい活字で組まれた文庫で吉田の「言葉の饗宴」が楽しめるのはとてつもない贅沢だと思われる。明晰な思考と貴族的な「教養」に裏打ちされた嗜好世界がこの世知辛い世の中において保障されるのなら、（吉田が終生その必要性を主張し続けた）「上流社会」も決して悪くないと言えるだろう。

作者介绍:

吉田 健一

1912年東京生まれ。幼少のころから、外交官の父・吉田茂(のち首相)の任地に従ってイギリス、フランス、中国などで育つ。その後、ケンブリッジ大学に学ぶ。文芸批評、ヴァレリー、ロレンスなど、英仏にわたる翻訳、また随筆、小説などで多彩に活躍。1977年没(本データはこの書籍が刊行された当時に掲載されていたものです)

目录:

[酒肴酒 下载链接1](#)

标签

日本

日文

评论

[酒肴酒 下载链接1](#)

书评

[酒肴酒 下载链接1](#)